Osaka University Knowledge Archive

Title	ヨーロッパにおけるF.L.ライト受容の一断面 : J.J.P.アウトの言説をめぐって
Author(s)	本田, 昌昭
Citation	デザイン理論. 2006, 48, p. 88-89
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53236
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

ヨーロッパにおけるF. L. ライト受容の一断面
── J. J. P. アウトの言説をめぐって ──

本田昌昭／大阪工業大学

1．はじめに

ヨーロッパにおけるF. L. ライト［1867-1959］の影響については，これまでも繰り返し言及されてきた。そしてその場合，必ずと言って良いほどオランダは，その議論の俎上に載せられてきた。本論は，その影響の渦中にあったと言えるオランダ人建築家J. J. P. アウト［1890-1963］によって著された論文「フランク・ロイド・ライトのヨーロッパ建築への影響」[1]（1926年）を考察の中心に据え，ヨーロッパにおけるライト受容の一断面として，アウトがライトの影響を如何に理解していたかについて考究するものである。

2．ライトと「キュビスム」

同論文の冒頭においてアウトは，ライトを「我々の時代における最も偉大な人物の一人」であると述べている。このような最大級の賛辞を与えられたライトのヨーロッパにおける影響は，彼の形態が一人歩きしてしまったために「直ちに成功しなかった」ものの，「より根本的に知られるようになってからはひとつの啓示としての役割」を果たすこととなったとアウトは言う。それは「旧世界の建築をむしばんできた細部表現からの解放」を意味し，ライトの作品において，「量塊の堆積」「要素間の関連」「空間の流動性」として顕現する。そしてアウトは，このような造形上の特徴を実現したライトの設計手法が，「ヨーロッパの大多数の近代的な建築生産の特徴となるであろう」と書き記す。ここに，ヨーロッパにおけるライトの第一の影響が提示されている。ただし，近代建築の成立は偏にライトに帰するべきものではないことをアウトは強調する。アウトは，ライトと並んで「キュビスム」の存在を指し示し，この二つの影響があってこそ，先の造形上の特徴が生まれ得たと言うのである。両者の影響は，専ら形態を崇めるという形で現れることとなり，その一方で，ライトが望み，「キュビスム」が目指した「時代の欲求や可能性，つまりは時代の要求に基づいた建築」という理念は顧みられることがなかったとの解釈が示される。結果として「建築」は，「形態の制約・厳しさ・精確さ，単純性・合法則性」を志向しながらも，帰結としての「形」が多大なる影響力を持つこととなったのであった。

ここでアウトが，「キュビスム」という語を建築における「新しい動き」という特別な意味において使用していることは注意しておかねばならない。

3．建築における「キュビスム」

アウトは，ライトと「キュビスム」の「表面的・外面的」な類似性について，「矩形への意志，三次元的なものへの傾向」に言及している。しかし注目すべきは，両者が「本質的にはまったく異質であり，むしろ対立的ですらあった」と論じている点であろう。形態上の類似性を認めながらもアウトは，ライトに「大げさな造形，感覚過剰，アメリカの“高級生活”」を感じ取り，一方「キュビスム」に「清教徒的な禁欲，精神的な節制」を読み取る。そして「キュビスム」のこの内なる意志が「ありとあらゆるものを包み込んだ抽象」へと結実したと指摘する。アウトは，

建築が「趣味」の問題に終始していた混乱期を抜け，「構成的なものの概念，関係の価値の回復」「線の本質的な意義，形態の圧倒的な厳しさの認識」「空間の重要性の認識」が確認できる新たなる段階に至ったと考えていた。このことをもってアウトは，「キュビスム」を「新しい古典主義」の始まりと位置づける。アウトは，「新しい古典主義」を，いわゆる歴史主義的な古典主義ではなく，「数と量，純粋さと秩序，規則正しさと反復，完全なものと彫琢されたもの」といったものへの欲求をその特徴する非歴史的な古典主義と定義する。

4．ライト信奉の罪

アウトは，「ライトが長い間熱心に説いてきたものの発展が作品への誤解によって損なわれたこと」，そしてそれが，「彼の後継者たちの上面な態度」によるものであったことを「悲劇的」であると形容している。この意味では，ヨーロッパ建築におけるライトの影響は正しく機能したとは言えないのかもしれない。多くのライト信奉者が，ライト作品の剽窃に止まり，「生活の基盤としてきわめて重要な」理論を欠いていたとアウトは言う。「如何なる美の基準もなく，伝統的な支えもない」時代であるからこそ，「理論」が必要不可欠であるとアウトは訴える。また理論なき模倣は，それまでの建築の歴史においても繰り返し試みられてきたが，過去の建築ではなく同時代人が建てたものを模倣するという状況は，断罪されねばならないとの主張が示される。そしてその攻撃の矛先は，単に模倣という行為だけでなく，「最新流行の形態と有機的な生成の身振り」によって，「純粋な建築をめぐる争いの場」から逃れようとしたことに向けられたのであった。

5．おわりに

上述のように，アウトによればライトと「キュビスム」は，作品における形態上の類似性に加え，「時代の要求」に基づいて建築の創造を目指したという点においてその志向を同じくしていた。しかしながら，ライトがアメリカの上層階級の生活を「時代の要求」と捉えたのに対し，「キュビスム」はそれを労働者の生活と措定したのであった。つまりライトの作品は，ヨーロッパ近代建築の成立に形態的刺激を与えることとなったものの，ライトが捕捉した「時代の要求」は，ヨーロッパにおいては共有されるものではなかったのである。言い換えるならアウトは，ライトの作品が理論なき模倣を通じてヨーロッパに浸透していったと捉えていたと言えよう。

1910年代後半のアウトの作品や言説からは，ライトへの熱狂を確かに読み取ることができる。しかし本論で取り上げた論文では，ライトの影響をその追随者の「模倣」という側面から論ずることで，この建築家への批判的な視点が披瀝されている。つまり1920年代半ばにおいてアウトは，ライトを賛美の対象としてのみ扱うのではなく，その重要性を相対化し，さらに言うならば，自身が「キュビスム」と呼ぶ運動の正当性を引き立たせる役回りをこの建築家に担わせたのであった。

註：

1）Oud, J. J. P.: 'Der Einfluss von Frank Lloyd Wright auf die Architektur Europas (Ein Essay)', *Holländische Architektur,* Bauhausbücher nr.10, München, 1926, pp. 77-83.（『オランダの建築』，貞包博幸訳，中央公論美術出版，1994年。）

なお，本稿において「　」付きで表記した箇所は，一部強調として用いているが，主に同論文からの引用を意味する。本来ならば，それぞれにページ数等を注記すべきであるが，紙幅の都合上省略した。